様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2023～2024
課題番号：２３Ｋ１８９０１

研究課題名（和文）校内授業研究における知識創造を支える研究推進組織のマネジメント

研究課題名（英文）Management of Leadership Teams to Promote Knowledge Creation in Lesson Study

研究代表者
有井　優太（ARII, Yuta）

新潟大学・人文社会科学系・講師

研究者番号：００９８３３１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、校内授業研究において研究推進組織が如何に機能しているのかの検討を軸に，「日本の校内授業研究の持続性」に問うことにつながる知見を創出することを目的とする。その成果を、学校改革支援や研修で実践現場に対して活用したほか、学術論文として新潟大学教育学部紀要（1本）、査読有りの国際学会誌（1本）にまとめ公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の校内授業研究は、2000年代以降世界的に注目を集め世界的に普及した。しかし、日本の授業研究をモデルに実践を行っても持続的にその展開を進めることに課題を抱えていた。そうした状況において、本研究では、どのような場においてどのようなリーダーシップを発揮することが教師の学習に効果的であるのかや、授業研究の多層性に着目した支援の在り方を問い校内授業研究の持続性につながる知見を提示した。こうした教師のリーダーシップと学習との関係や授業研究の多層性に着目した研究はこれまでに行われていなかった。また、教師の学習をどのように促すことができるのかを示す本研究の知見は国内外の実践において意義のあるものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to generate insights that will lead to questions about the sustainability of Lesson Study in Japan, focusing on examining how research team function in Lesson Study. The results were used to support school reform and professional development programs, and were published as scholarly articles in the Bulletin of the Faculty of Education, Niigata University (one article) and in an international peer-reviewed academic journal (one article).

研究分野：教師教育

キーワード：校内授業研究　リーダーシップ　教師の学習　学校改革

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

専門家である教師の学習を支える研修システムである校内授業研究が Lesson Study として実践的/学術的に国内外で注目を集めて久しい(以下、組織的に学校で行わる授業研究を「校内授業研究」と記す)。校内授業研究は,日本で学校制度が整えられた当初から現場の教師たちによって行われてきた営みである。そうした長い歴史を持つ校内授業研究は,1999 年に出版された The Teaching Gap において Lesson Study として英語で諸外国に紹介され,2000 年以降に実践が世界的に拡大した。しかし、諸外国に校内授業研究を導入しても学校や教師,子どもにとって有効なシステムとして機能し続けることが困難であるという状況があり,校内授業研究の持続性(sustainability)は現在、重要な論点となっている。そのため,長年にわたり校内授業研究の実践を積み重ねてきた日本の実践を対象として校内授業研究の持続性についての知見を創出することは喫緊の課題であると言える。

校内授業研究に関する先行研究において、「授業後の検討会で教師はどのように学ぶのか」に関しては多く議論が展開されてきた(e.g., 北田 2008;坂本 2011)。しかし、授業後の協議会に焦点を当て、そこで教師が何を学ぶのかを検討するだけでは校内授業研究の持続性について問うことはできない。学校組織における 1 つの研修の形態として位置づいている日本の校内授業研究の持続性を問うためには、その企画・運営を司る研究推進組織に焦点を当てることが必要となる。しかし、校内授業研究の持続発展要因として研究推進組織の重要性が理論的に指摘されているものの、実証的な検討が行われていないという状況があった（木原ら 2015）。

そうした課題意識のもと、研究推進組織のリーダーシップに焦点を当てた研究を行ってきた(e.g., 有井 2019, 2020, 2022, 2023)。その中で、研究推進組織のリーダーシップと教師の学習がどのような場においていかに機能しているのかを解明する必要性や、学校内外の資源から得られる知が校内において循環する中で新たな知が創造されていることから授業研究の多層性に着目した検討の必要性が課題として見出されてきた。

２．研究の目的

本研究では、校内授業研究において研究推進組織が如何に機能しているのかの検討を軸に,「日本の校内授業研究の持続性」に問うことにつながる知見を創出することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、2 つの検討を行った。第１に、校内授業研究における研究推進組織と教師の学習との関係についての検討である【研究１】。研究推進組織のどのようなリーダーシップが、校内授業研究におけるどのような場(授業づくりや事後検討会など)での教師の学習に有効であると認識されているのかを明らかにした。そのために、複数校を対象とした質問紙調査を実施した。得られた回答はマルチレベル分析を用いて分析を行い、校内授業研究の場ごとに、教師の学習に有効なリーダーシップの在り方を明らかにした。

第 2 に、校内授業研究における研究推進組織の役割を問うために行うフィールドワークから、校内授業研究において周辺に位置づけられやすい教師の特徴を特定した。その上で、そうした教師に対して、どのような支援ができるのか、授業研究の多層性に着目して検討を行った【研究２】。

４．研究成果

【研究 1】においては、以下の知見が得られた。

第１に、本研究の調査サンプルにおいては、校内授業研究におけるリーダーシップや学習認識は、学校間ではなく、学校内における差として表れていた。第 2 に、知識創造におけるどのフェーズにおいても研究推進組織の分散型リーダーシップが学習認識に対して有意な影響を及ぼしていた。一方で、研究推進組織の垂直型リーダーシップは共同化、連結化、内面化のフェーズにおいて学習認識に対し有意な影響を及ぼしていた。第 3 に、校長のリーダーシップは単独では、SECI のどのフェーズにおいても学習認識に有意な影響を及ぼしていない。しかし、表出化と内面化のフェーズにおいて、研究推進組織のリーダーシップと各フェーズでの学習認識との関係は校長のリーダーシップによって調整されていた。ただし、表出化のフェーズにおいては校長のリーダーシップと研究推進組織のリーダーシップが同時に認識されている場合には有意に負の影響を及ぼしていた。

【研究 2】においては、まず、学校組織において周辺に位置づきやすい存在として、若手教師の存在に着目した。若手教師の学習についてはこれまで、学校文化にいかに参入していくことができるか、またその参入の支援の在り方について問われてきた（e.g., 脇本・町支 2015；石崎・岡崎 2018）。そこで、若手教師と授業研究の専門性を背景に持つ研究者が協働で授業研究に取り組むことで、学校文化への参入というあり方ではなく、若手教師の専門性開発を促す授業研究の方法論を開発し、その方法論における若手教師の学習の様相を明らかにする必要性が課題として見出された。

そこで、若手教師と研究者が協働で授業研究を行い、そこでの若手教師の学習の様相を van

Manen の省察の時間性と様式（表 1）に着目して検討を行い以下の知見を得た。

第 1 に、本研究の方法論において，協力教師は単元設計の際に何をどの順序で教えるべきかという予期的省察を行っていたことで，実践後に具体的な授業分析を媒介に研究者と協働で行った想起的な省察（水準 3 ）において，その想定と子どもの学びの実態との差異が浮き彫りとなっていた。このように教科内容についての探究を行う中で子どもの躓きに気づき，当該単元や授業の改善につながる見識を得ていた。さらに，授業実践中の見取り方を対象化すること（活動的あるいは相互作用的な省察の仕方自体の省察：水準 4 ）を通して，グループワークにおける子どもの学び方という学習観の問い直しや単元設計の際に何をどの順序で教えるのかという視点だけでなく，子どもの学習過程という視点から問い直す必要があるという認識の深化が行われていた（予期的な省察の仕方自体の省察：水準 4 ）。近年の授業研究においては，授業実践後に協働的に実践を振り返るという想起的な省察の重要性が指摘されていた（Dudley 2013；Akiba et al. 2019）。しかし，省察の時間性と様式いう点から研究者と若手教師が協働して水準 3 や 4 の次元で行った省察過程の分析を試みると，実践前の予期的省察や実践中の活動的あるいは相互作用的な省察が想起的な省察の中で喚起された省察と関連していることが示された。

第 2 に、学校外における研究者との関わりだからこそ喚起できる省察がある可能性についてである。研究者と若手教師が協働して省察を行う実践を行う際に重要となるであろう視点の 1 つとして，予期的省察を踏まえ，実践者自身の授業実践を分析することが挙げられる。若手という学校組織の中において周辺的な立場にあった協力教師は，校内の先輩教師から実践を見てもらう機会があっても，予期的省察を踏まえずあるべき姿を指導されるだけでは省察が喚起されていなかった。そうした若手教師の経験を踏まえ，本研究では，若手教師の授業観・教科観や課題意識，予期的省察を踏まえた上で，学校外部の研究者が，授業研究・カリキュラム研究の知見を活かした授業分析を行い，それを介した水準 3 や 4 の次元で協働して想起的な省察を行った。授業研究やカリキュラムの専門性を有する研究者がその専門性を活かし授業研究に関 わることで，教師同士で行う協働省察とは異なる水準で教師の省察を喚起できる可能性がある。しかし，ただ理論的な分析を教師に示すだけではなく，教師の授業観・教科観，課題意識，当該実践のねらいやそのための手立て（想起的な省察）等を踏まえつつ，具体的な授業実践に根差して理論的な分析を行うことが教師の省察を喚起するためには必要であることを本研究の知見は示唆している。

また，単元レベルで継続的に実践に関り授業分析を行うことができるのも学校外の研究者だからこそできる専門性開発の支援の在り方である。今回の取り組みは 1 単元のみの実施であったが，日ごろ水準 1 の省察に留まる若手の協力教師が，水準 3 や 4 水準での省察を今回の協働省察で経験したことは，協力教師自身が今後自律的に省察的実践を行っていく基盤となる可能性があるという点で意義があると考えられる。このように，授業研究やカリキュラムの専門性を授業分析に反映させることや単元レベルで継続的に実践に関わることができることは学校外部の研究者の専門性開発支援の強みである。しかし，研究者と実践者との対話では，当該単元の授業改善にとどまらず，理論を用いた深い洞察を得る省察（水準 3 ）や省察の仕方自体の省察（水準 4 ）の水準で若手教師の省察を喚起できた一方， そこで喚起された省察をどのように具体的に実践に活かしていくのかという対話にはならなかった。そのような具体的な手立てについては，実践知豊かな先輩教師との対話の方が若手教師の学びになりやすいと考えられる。

表1 省察の時間性と様式の分類

	省察の時間性	省察の様式
実践前	①予期的な省察 可能な選択肢を検討し，計画を立てることで予想される出来事や計画の結果として自分や他者がどのような経験をするかを予想することができる。この種類の省察は、状況や他者に対し組織的で意思決定的なよく準備された方法でアプローチすることに役立つ。	①日常生活の中に埋め込まれた慣習化、ルーチン化された思考や行動の水準(水準1) 日常的な行動や思考。
実践中	②マインドフルネスな省察 タクト豊かな教師の相互性を規定する。言語を介しないこの種類の省察は他の種類の省察の形態とは異なる。 ③活動的あるいは相互作用的な省察 行為の中の省察と呼ばれることもある。立ち止まって考える種類の省察であり，この省察により教師は実質的に瞬間的な判断を下すことができる。	②偶発的に日常の経験を言語化し、経験則や実践的な原則の定式化を行う水準(水準2) 日常の経験について言語化し,経験的・実践的な原則，するべき／するべきでないことという限定的な洞察を定式化する ③経験を体系的かつ持続的な方法で理論的理解や批判的洞察を得ることを目指す水準（水準3） 既存の理論を用いることで、自分自身や他者の経験について体系的かつ持続的な仕方で省察を行い,現象をより深く理解する。
実践後	④想起的な省察 過去の経験を振り返り，子どもの経験の意味について新たな洞察を得ることができる。	④自分の行っている理論化の形式について省察する仕方自体を省察する水準(水準4) 知識が行為の中で如何に機能しているのか,行為の積極的な理解に知識が如何に適応可能かを理解する。教育者は、思慮深く省察的に行動するだけでなく、思慮深い経験や性質や意義、自分たちの使用している知識の種類を理解することが必要である。

van Manen（1991）とそれを翻訳した村井（2015）を参考に作成　有井ら（2024）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 有井，優太,星，瑞希,松村，一太朗,木塚，誉貴	４．巻 16（2）
２．論文標題 単元レベルの授業分析を介した若手教師と研究者の協働省察 ： 省察における時間性と様式に焦点をあてて	５．発行年 2024年
３．雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	６．最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuta ARII	４．巻 13(4)
２．論文標題 Relationship between teacher leadership and teacher learning in Japanese lesson study: focusing on the knowledge-creation process	５．発行年 2024年
３．雑誌名 International Journal for Lesson and Learning Studies	６．最初と最後の頁 265-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/IJLLS-02-2024-0045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果の一部は、博士学位論文「校内授業研究における研究推進組織の動態」としてまとめ、2024年3月に東京大学において博士（教育学）の学位を取得した（学位授与番号：甲第41137号）。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関